

# 吉野靜

(觀)

シテ  
静御前  
ワキ 佐藤忠信  
狂言 衆徒

所 大和吉野山

「これは都道者にて候。衆会の御座敷とも存ぜず候御免あらうずるにて候。

狂言 「さては都人にて候か。判官殿の御行方をば何と申し候ぞ。

ワキ 「上は御一体なれば。終には御中なほらせ給ふべき由申し候。

狂言 「さていかやうにて御落ち有りたると申し候。

ワキ 「十二騎とこそ承つて候へ。

狂言 「十二騎ならば追つかけ討ちとめ申さう。

ワキ 「暫く。十二騎と申すとも。余の勢百騎二百騎にもむかふべし。かやうに申すは都の者。当山を信じ参る上は。いかにも御寺も宿坊も。難なくおはしませかしと。思へばかやうに申すなり。此上は兎も角も。

地 「御はからひぞ吉野山。く。よしなき申し事。

洩れ聞えなば判官の。後とのとがめもおそろしや御

暇申し候はんく。

シテ

「さても静は忠信が。其契約を違へじと。舞の装束  
ひきつゝろひ。忠信遅しと待ち居たり。

ワキ詞

「これは都道者にて候が。法楽の舞の由承り。下向  
道を忘れて候。はやく舞を始め候べし。

シテ

「都の人と聞けばなつかしや。判官御道せばき事。  
世上の聞えいかなるぞ。都人こそ知るべけれ。

ワキ詞

「終には御中なほらせ給ふべしと。聞くより人々先

非を悔ひて。皆々恐れ申すなり。

シテ

「扱はうれしやくはしくも。知らせ給ふか都人。

ワキ詞

「あまりに事延び時うつりぬ。心得給へ舞の袖。

シテ  
「げにのう言葉多き者は品すくなし。かやうに我等  
言の葉過ぎば。なかく人もあやしめて。もしも  
それとか三吉野の。かつて知らすな。

一声  
「静に囁せや。静が舞に。

地  
「衆徒も時刻や。移すらん。

シテ 「神こそ納受ましますらめ。

地 「げに此御代も静が舞。

シテサシ 「然るに彼判官は。神道を重んじ朝家をうやまひ。

地 「ひとへに忠勤をぬきんでゝ。私の心更になし。

シテ 「人は讒し申すとも。

クセ 「神は正直のかうべに宿り給ふなれば。静が舞の袂に。暫くうつりおはしまし。我君を守り給へと。祈るぞ哀なりける。

「そもそも景時が。その讒言の水上を。思へば渡辺や。流るゝ水に満汐の。逆櫓たてんと浮船の。梶原が申しし事。よも順義にて候はじ。されば義経は。すぐに治めし三吉野の。神のちかひの真あらば。頼朝も聞しめし直され。義経執節の勅を受け。

洛陽の西南は。これ分国となるべし。さあらば当山の。衆徒ことぐく参洛し。帰依渴仰の御袖に。めぐみをいただき給ふべし穴賢。不忠なし給ふな御

咎は候はじ。

シテ  
「但し衆徒中に。猶いきどほり深うして。

地  
「進みて追つかけ給ふとも。其名きこゆる人々を。  
討ちとゞめ申さんは。片岡増尾鷲の尾。さて忠信  
はならびなき。精兵ぞよ人々に。防ぎ矢射られ給  
ふなど。語ればげには衆徒中に進む人こそなかり  
けれ。

シテ  
「賤やしづ。 (序の舞)

シテ  
「賤やしづ。賤の苧環。くり返し。

地  
「昔を今に。なすよしもがな。あまりに舞のおもし  
ろさに。時刻をうつして進まぬもありけり。又は  
判官の武勇に恐れてよし義経をばおとし申せと。  
詮議を加ふる衆徒も有りけり。さるほどに時うつ、  
て主君も今は忠信が。謀にて難なく遙かに落し申  
しつ。心しづかに願成就して。都へとてこそ。帰  
りけれ。

底本.. 国立国会図書館デジタルコレクション『古今謡曲解題』丸岡桂著  
『四流対照謡曲二百番下巻』芳賀矢一訂